

親鸞さまの

【本文】

七宝の宮殿にうまれては

五 百歳のとしをへて

三 宝を見 聞せざるゆる

有 情利益はさらになし

【意識】

無限の宝石で 設えられた宮殿に
往き生まれることが出来ようと

そこでは五百年の歳月を経ても、

仏(さとりを得たお方)、法(教え)、
僧(教えを共にする同胞)という宝
を見聞きすることが出来ません。つまり、真の極楽浄土に往くことが
叶わず、成仏できない故に、遺され
た人々の力になることも出来ないの
です。(だからこそ、縁ある今、進ん
で法話を聞くことが大切です)

【私の味わい】

何を私の人生の宝と呼ぶか。生きている間に大切したこと、延長線上がそのまま自分の現在であり、未来なのだ。この教えを、自業自得といいます。

心で思ったことは、やがて言葉や行動となって現れます。眼の前の人を慕わしく思えば、自ずと言葉は柔らかいものになり、憎らしく思えば自然と目が物語るものです。

そういった意業、口業、身業の積み重ねは、誰の責任でもない、自らのものとして引き受けていくのが仏教徒です。

「お浄土などあるものか」、これは現代だけでなく、江戸時代でも口にされていた言葉のようです(出典『妙好人伝』)。その書に、あるお医者さんが言葉の主だと記されています。そのお医者さんがどのような人生を辿ってきたのかは判りませんが、先の言葉を発した後に幼い娘さんを亡くされたことが転機になって、娘が往った極楽という世界がどのようなかを尋ねるため、お寺に通い始めたことが述べられています。

このお話は、以前この紙面でご紹介しましたが、何度話しても話尽くせない奥行きを持つているように感じられてなりません。結局、「お浄土などあるものか」という言葉が口から出るのは、誰の責任でもない、阿弥陀様の責任でもない、自分の日々の積み重ねの結果です。その未来は自分で引き受けていく必要があるのでしょう。しかし、そのような者を放っておかれず、法を聞くべくお慈悲を以てお誘い下さる方が阿弥陀様です。そのご縁を大切に法話を聞き続けるなら、極楽行きがその人の未来になるのです。